

〈2〉大谷石の風景・大谷石の文化 — 未来へ

NPO 法人大谷石研究会
理事長 塩田 潔

1 はじめに

私と大谷石の出会いは、幼少時に遡る。多分に4～5歳の頃だったと思うが、何か悪戯をしたか、母に甘えて野良仕事の邪魔をしたかは定かではないが、父親に石蔵に閉じ込められ、泣き喚いていた記憶が何度かある。数時間経って、決まって鍵を開けてくれるのが母親であった。石蔵の中の暗い闇の空間は今も鮮烈に覚えている。

かなり後になるが、建築を志し社会人になって20代の後半、約1か月の間欧州旅行をする機会があり、ギリシャ、イタリア、スイス、フランス、ドイツ、イギリス、デンマーク等の歴史的建築物および現代建築物を見て回る中、当時インターナショナルスタイルと持て囃されていた英国の建築家ジェームス・スターリングのレスター工大と図書館を見たとき、これがインターナショナルスタイルかとショックを受けた。日本でわれわれが目にするのは雑誌等に風景が切り取られ、建築物しか見えないのである。そして、それらを評論家や有名建築家が絶賛する文章がついて回る。いざ現地に行って風景の中に溶け込んでいる建物を見ると、土地の素材で、その土地の気候、風土を十分に考慮し、風景の中にしっかりと根を張ったヴァナキュラー（土着的）なものとしての印象が深く、感動した記憶がある。私は、その土地の素材を最大限に使い、ヴァナキュラーなものを追求していくと、その中にインターナショナル（グローバルズム）的な可能性が潜んでいるのではないかと思えるようになった。果たして自分の周りに何があるのだろうかと考えた時、確かなものとして「大谷石」があった。

20世紀末まで、日本は高度成長を続け、オイル

ショックがあったもののバブル期を迎え、ひたすらスクラップ&ビルドの時代が続いた。やがてバブルが崩壊し、空気が淀んでしまったような21世紀に入った。世の中どうなるのだろうと思いつつ周りを見渡すと、街のあちこちに大谷石の「石蔵」が点在しているのが目に入ってきた。そのような時間を持つようになったのだろう。それらを調査してみよう、そう思ってアクションを起こした。建築士会宇都宮支部の十数人のメンバーが平成12年、平成17年の2度にわたり、市中心部、その周辺部の調査を行い、およそ400棟近い石蔵等の大谷石建造物の存在を確認した。

その頃、任意の団体「大谷石研究会」が発足し、「石の蔵」や「花野（現ムナカタ）」が石蔵活用の飲食店として蘇り、メディア等が盛んに取り上げるようになった。それぞれが相談したわけでもなく、自然発生的に「風」が吹いて来たのである。

それから十数年の歳月が流れた。

2 旧帝国ホテル・ライト館に使われ 一気に付加価値が高まる

私と旧帝国ホテル・ライト館（内幸町）との出会いは、大学の2～3年の頃だと思う。私の知人（宇都宮在住・早稲田大建築出）が時々、帝国ホテルに泊まりに来て何度か呼び出しがあった。2階ラウンジでコーヒーを飲みながら、客室の中を案内されたりしながらF・L・ライトの話を聞かされたりした。そんな中、昭和42年11月15日で閉館ということになった。私は11月14日の閉館前日、宿泊客がごった返す中こっそりと写真撮影をしてきた（写真1）。その印象は、外装は大谷石の汚れがひどく風化も一部進んでおり、内部は薄暗く、ロビー奥の大胆な生け花がスポットライトを浴びひとときわ華やかだった記憶がある。今の明治村のものとはかなり印象が違っていた。大正12年の竣工からわずか44年の建築生命であった。



写真1 旧帝国ホテル・ライト館（内幸町）

F・L・ライトが来日し、旧帝国ホテル・ライト館等の設計をしたことは、日本の建築の近代化に大いに影響を及ぼしたと言われている。そして、その内外装に「大谷石」を使用したことはその産地「大谷町」にとって衝撃的なことであった。それまで宇都宮周辺では、擁壁、石塀、石蔵等に多く使われ、都内でも擁壁、石塀、道路の排水溝程度が多く、本格的な建築は少なかった。ライトが最初に使おうとした「蜂の巣石（石川県産の石）」は産出量が少なく断念したそうである。その代わりに「大谷石」に白羽の矢が立った。全国の凝灰岩等の軟石は、そのほとんどが土木用の素材としてのものであり、大谷石もその傾向が強かったが建築物としては、県内では石蔵、都内では一部教会建築に使われていた。帝国ホテルの建築を機に一気に近代建築に使われるようになる。

宇都宮市内では、カトリック松が峰教会、聖ヨハネ教会、旧大谷公会堂、解体されてしまったが旧県教育会館、旧宇都宮商工会議所、仲見世通りの映画館、そのほか公共建築や商業建築にも多用された。全国各地に凝灰岩等の「石の文化」が多く存在するが、「大谷石」ほど、建築の素材として関東首都圏はもとより、全国或いは世界に普及したものはない。石の素材としての特質、大谷町という輸送手段を含めた地の利、建築家F・L・ライトの存在が大きく影響していることは紛れもない事実である。

3 宇都宮独特の景観形成

宇都宮を中心に栃木県内には、旧街道沿いに大谷石の石塀、石蔵等が集積して独特の景観を呈している集落が数多く存在する。平成24年、当研究会が宇都宮市から「景観整備機構」¹第1号の認定を受けたのを機に「街道集落」²の調査を宇都宮大学工学部（現・地域デザイン科学部建築都市デザイン学科）の安森研究室（安森亮雄准教授）と協働で調査を行うことにした。これは街道沿いに集積している石蔵集落が年々歯が欠けたように減少していくのを危惧し、今のうちに調査し、保存伝承していくこと、これらが宇都宮にとってブランドであることを所有者の方々を含め、広く市民に、行政に訴えたかったからである。

(1) 徳次郎町西根地区

平成24年に調査した西根集落は、旧日光街道沿いの20数戸の集落であり、そのうち62棟もの石造建造物が存在する。国道293号線を挟んで、男抱山付近で「徳次郎石」³が産出され、張り石蔵や石屋根、住まいの壁に利用されていた。

この集落は、明治初期まで火災が多く、防火対策として道路側に石塀や石蔵を多く配している。これは防火のみでなく、ステータスな意味もあったと思える。この地区は優れた石工を多く輩出しており、蔵の入り口や窓回りの精巧な彫刻には、競って鑿^{のみ}を振るった「西根石工」の心意気が伝わってくる。

(2) 上田原町地区

平成25年に調査した田原街道沿いの上田原町集

¹「景観整備機構」は、良好な景観の形成に関する調査研究を行ったり、それに関わる事業を行う団体に対し講師派遣や情報提供を行う業務を担う。

²「街道集落」とは、筆者が作った造語、街道に集積した集落の意である。

³「徳次郎石」とは、徳次郎町男抱山付近で産出したミソのない青白い凝灰岩である。

落（旧河内町）は、鬼怒川水系の山田川流域に位置する米どころである。調査した24世帯のうち45棟の石造建造物があり、徳次郎石の張り石蔵や石屋根も散見されるが、曲がりくねった交通量の多い、やや狭い道路側には塀と一体になった石蔵が多く見受けられる。これも防火対策とステータスの意味合いが濃い配列である。これからバイパスが開通すれば生活道路が復活し、歩行者にとって安全安心が確保されるであろう。

(3) 上田町地区

平成26年に調査した上田町集落（旧上河内町）は、全長600～700mにも及ぶ道路両側に水路が流れ、玉石積みみの石垣の上に大谷石塀が延々と続く景観は見事である。季節によっては、サルビア等のプランターを配し、道行く人の目を楽しませてくれる。鬼怒川水系の西鬼怒川・御用川流域の米どころであり、後継者にも恵まれ、コミュニティ意識の高い集落である。40世帯余りの中、各戸2棟以上の石蔵を所有しているところが多く、石塀の高さが見事にそろった景観は農村ならではの共同体意識のなせる業であろう（写真2）。



写真2 上田町地区

(4) 芦沼町地区

平成27年に調査した芦沼町集落（旧上河内町）は、鬼怒川水系の河岸段丘の内側にあり、男体おろしから身を守るべく、この日当たりのよい肥沃な土地に集落ができたのは自然の理であろう。かつては泉が湧き出ていたそうである。

全体に16世帯のうち、8世帯の石蔵が集積し、近くの上田町集落とはまったく違った異国情緒の景観が生まれた（写真3）。



写真3 芦沼町地区

上田町地区、芦沼町地区が共に平成27年の宇都宮市の「第17回市まちなみ景観賞」の大賞に輝いたことは、調査した私たちにとって大変喜ばしいことである。「市内でも有数の密度の高い大谷石集落による景観」と評価された。集落の人達にとって「プライド」であり、宇都宮市民にとって「ブランド」であろう。そのほか、石蔵、石塀等が集積しているところは、白沢街道の竹林町付近、旧栃木街道の西川田町付近、御蔵町から不動前（グランドホテル方面）に抜ける街道、下ヶ橋町地区、下川俣町地区等市内、県内にも数多く大谷石の独特の風景が存在する。

また、土木遺産とも言うべきものが数多く残されている。東武宇都宮駅のプラットホーム東側の擁壁は、長さ100mを超え、高さも5m前後あり、建物でほとんどが隠れているが、もし全貌が見渡せたら秀逸である。

星が丘の坂道の大谷石の石畳と両側の石塀との織りなす景観は、市内でもここしかない景観であり、最近風化や破損が激しく、まだら模様のアスファルト補修が悲惨な状況にあるが、地元住民の保存を願う声は貴重であり、安全を確保しつつ修景され宇都宮の顔となることを望みたい。

そのほか、河川の擁壁や橋として、かつて農業や生活を支えてきたものが田園風景の中に

ひっそりと存在する貴重な遺構に出くわすことがある（写真4）。



写真4 篠井町江川に架かる石橋

4 諸々の日本の近代化産業を支えてきた大谷石

市内、県内を問わず、県外近郊の都市においても、日本の産業の近代化に大谷石が大いに関わってきた。今でも市内外で目につくのは、酒造会社、味噌製造会社等の醸造庫や貯蔵庫に大規模の石蔵が使われていることである。市内大通りにかつてあった「小林壱三郎商店」には、約300坪もの醸造蔵があり、私も見学させていただいたことがあったが、その壁面を支える30cmの厚みの大谷石の重厚な様は何とも言えない風情があった。残念ながらその後解体され、今はマンションが建っている。今も現役で頑張っているのが、「青源味噌」の醸造蔵と貯蔵庫としての石蔵が街のランドマークになっている煙突や変化のある屋根群と共に趣のある景観を形成している。酒造会社の酒蔵としては、本町にある「虎屋本店」、柳田町の「宇都宮酒造」にもそれぞれ大きな石蔵があり、酒造りには欠かせない存在である。そのほか、県内の酒造会社には大きな石蔵を構えているところが多くみられる。石蔵の中で貯蔵された酒はさらにマイルドになり、美味しくなると言われている。

大谷の地下採掘場跡でワインや生ハム類を貯蔵しているのはそのためである。

今も伝統的な「注染」という技法で、手拭いや浴衣地を製造している市内錦町の「中川染工場」の生地貯蔵庫と文庫蔵の2つの石蔵と石塀が一体となった景観、それに続いている西側の河川の擁壁と隣地へ繋がるアーチ型の石橋が一連の風景をつくり出している。かつてはこの川で染物の水洗いをしていただろうか。ぜひ、守ってほしい景観である。

かつて、真岡地方一帯は木綿の産地であった。今も保存されている「料亭金鈴荘（旧岡部呉服店別荘）」や「久保記念館」等にかつての真岡木綿の繁栄が偲ばれる。金鈴荘の重厚な石塀は、この地方で多く産出していた礫山石（大島石・市内礫山地区で採掘されていた凝灰岩）が使われているが、近年は大谷石が多く使用されている。

「久保記念館」は、美術評論家として有名な久保貞次郎氏の生家であり最近真岡市に寄贈され、整備されて市の観光交流館として再生された。大谷石で出来た主屋をはじめ、2棟の石蔵は繁栄していた時代の産物と言えよう。久保氏は、真岡小学校に「久保講堂（遠藤新設計）」を寄贈し、長年芳賀郡地方の芸術祭の表彰式と言えここで行うのが定番となっていた。芳賀町生まれの筆者も何かの表彰式や、野球大会のグラウンドとしてこの校庭を使用していたので思い出深い。この芳賀郡内の象徴といふべき「久保講堂」は、公共建築が集積した田町に移築保存され、国登録有形文化財として今も市民に親しまれている。

今も金融業として地元の商業、企業を支えている「真岡信用組合」が最近新築した「荒町支店」は、ファサードが大谷石積みグリッド状の壁面デザインであり、その敷地に建っていた歴史を刻んできた石蔵のモチーフを待合室の内部空間に再現し、残った石をポケットパークのベンチに再利用している。木綿の産地として栄えた真岡の歴史を金融面で支えてきたアイデンティティをしっかりと継承している。また真岡木綿は江戸時代、江戸の木綿のシェアの6割を占めていた時代もあった。今でも上等な木綿の

生地は「特岡」というそうで、特別な真岡木綿生地という意味だそうである。

筑西市(旧下館市)にある「中村美術サロン」は、江戸の後期から明治にかけて真岡木綿の間屋をしていた。その木綿を使用して明治末期から足袋底の製造、販売をしていた。結城紬や真岡木綿の産地に隣接する下館地区は、最盛期には全国の8割を占めるほど足袋底の生産量を誇り、足袋の産地行田市に卸していた。中村美術サロンでは、土蔵造りの店蔵は現在ギャラリーとして、地元の文化勲章受章者の陶芸家板谷波山や同じく洋画家森田茂の作品を随時入れ替えて展示している。その袖蔵の重厚な防火扉、防火窓を備えた石蔵は、足袋底製品の貯蔵用の出荷蔵として使用されていた。その奥にある江戸中期には醤油や酒の醸造蔵だった石蔵2棟も最近ギャラリーとして再生されている。膨大な敷地のさらに奥には、足袋底の製造工場跡があり、かつての栄華が偲ばれる。

足袋底を下館市(現筑西市)が卸していた行田市、ここはかつて江戸中期から足袋づくりが行われ、特に明治20年代以降足袋産業が盛んになり、最盛期の昭和13年頃、年間8500万足、全国シェアの8割を生産する日本一の足袋の街として繁栄した。その足袋の材料、製品を貯蔵した足袋蔵は土蔵造りで、最盛期には約200棟あったそうである。その土蔵の基礎は、ほとんどが大谷石を使っている。足袋の製造工場は木造の洋風小屋組みであるが、その基礎および腰石(3段積み)も大谷石を使用している。土蔵の足袋蔵の建設は、明治30年代マシンが導入されてから本格的になるが、昭和に入ってから大谷石造の足袋蔵が何棟か造られている。鉄道による輸送が可能になってからのことであろう。今は、約80棟の足袋蔵が観光用の施設や足袋の博物館やカフェ等の飲食店として再生され、街の活性化に寄与している。地域の産業を地道ながら支えてきた大谷石が街並みに溶け込み、今もしっかりと再生された足袋蔵の足元を支えている。うれしいこ

とに、足袋蔵を活用して街の活性化をしている「NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク(朽木宏代表)」が、足袋蔵の再生、改修に新たに大谷石を使用し、土蔵の足袋蔵と新しい大谷石のコラボレーションを見せてくれている。

日本の基幹産業であった絹織物産業は、足利、桐生、伊勢崎等両毛地区で発展を遂げた。特にその中心は桐生市であった。渡良瀬川と桐生川の2つの河川から町なかに水路を引き、水車を並べてその力で撚糸機を廻し、撚糸を大量に生産することができた。明治5年富岡製糸所が建設されることにより、日本の輸出の半分が生糸、さらに1/3が群馬県産という時期もあったそうである。明治中期から昭和30年代にかけて、群馬県の農家の過半数以上が養蚕農家であったという。

桐生市内に今も多く点在する鋸屋根の工場は、大正期に入ってから作られるようになり、戦後から昭和40年代までは、二百数十軒も存在していた。

その後年々減少し、今は用途として芸術工房、博物館、飲食店、和菓子店、美容室、倉庫等として再利用している(写真5)。



写真5 桐生市 鋸屋根工場

その鋸屋根の工場に大谷石積み、深谷産のレンガ積みが多く、地元の「藪塚石」⁴も一部使われているようだ。近年、重要伝統的建造物保存地区の

⁴「藪塚石」とは、群馬県太田市藪塚地区産の凝灰岩で、今は採掘していない。

指定を受け、街なみが整備されており、観光客も多く訪れている。

5 新しい大谷石の使い方、可能性 そして大谷は——

旧帝国ホテル・ライト館に、F・L・ライトが使用して以来、大谷石の付加価値は一気に高まり、諸々の公共建築、商業建築、教会建築等に使用されるようになった。ただし、組積造（積み石造り）としてではなく、鉄筋コンクリート造の張り石工法によるものが多かった。そして大谷石建築としての全盛期は、昭和に入って戦前までであろう。

戦後の高度成長期には、工業生産による新建材が台頭し、安価で作業性の良い製品に建築業界はシフトして行くことになる。その後の大谷石の活路は、宅地造成、石塀築造に見出し、大谷にとって全盛期を迎える。ピーク時の昭和48年の採掘量が89万トンで、金額が約100億円、約100軒の採掘業者がいて、3,000人を超える石材業関係の従事者がいたそうである。平成27年の採掘量は、1.22万トン、採掘業者は8軒、大谷石材協同組合の加盟会社は21社ということである。平成22年頃が底だったそうで、今は業界従事者も増え、受注量も全体に増えてきたようである。日本全体を見ると、閉山に追い込まれた凝灰岩等の採掘場が多く、続いているところでもせいぜい1~2社ぐらいがほとんどである。そんな中、大谷石は大変貴重な素材として、地の利にも恵まれ、埋蔵量もあり明るい未来があるのではないだろうか。

宇都宮市や栃木県では、県産材の大谷石を建物に使うと補助金がでる助成制度があり、これが大変人気で市民、県民の生活文化に寄与している。

大谷石は、色彩的には非常に地味であり、採掘時から時間と共に色合いが変化して行く特質があり、柔らかさ、温かみ、多孔質でミソがある独特の風合いを持っている。最近では、使い手（設計者等）

がいろいろ工夫するようになり、外壁等に使う場合石の重量感を軽減すべくグリッド状に積んだり、スリットを入れ奥行き感を持たせたり、他の材料との組み合わせにより石を引き立たせたり、樹木等とのコラボレーションにより風を感じる演出等多様なデザインが創出されてきた（写真6）。



写真6 竹と大谷石のコラボレーション

そして今大谷石は、県内はもとより関東首都圏をはじめ全国まで、さらにはニューヨーク、上海、香港、ソウル等世界にその販路を広げている。

宇都宮市は今、大谷石文化を「日本遺産登録」に向け、申請中だそうだ。大谷資料館等に最近若い観光客が多く訪れており、県内にもさらにインバウンド客を勧誘すべく、観光業者が諸々の新しいプランを企画していると聞く。

「大谷」に外貨が落ちるのは良いことではあるが、現状を考えるとけっして受入態勢が整っているとは言えない。

旧帝国ホテルにF・L・ライトが「大谷石」を採用したのはどんな意味を持ったのか、今まで200万トンをはるかに超える「大谷石」が建築用、土木用資材として産出され、県内はもとより、関東首都圏、あるいは全国に、世界に飛び立って、人々の生活文化を支え、日本の近代化産業の発展を支えてきたことを忘れてはならない。それらを踏まえ、「世界の大谷」を目指し、産業、文化、観光、芸術等総合的に、「新たな大谷」のあり方を考えて行くことが急務であろう。